

LEARN WITH ソフトバンク ～魔法のプロジェクト～ インクルーシブ教育 実践事例

事例の活用について

※本事例の知的財産は投稿者に留保されます、使用される際には出典として「LEARN WITH ソフトバンク ～魔法のプロジェクト 組織名」を記載ください。

■基本情報

組織名： 静岡県立藤枝特別支援学校
所在地： 静岡県藤枝市前島2281-1
※都道府県・市区町村
氏名： 原川 智幸
投稿月日： 2026年 2月 16日

■インクルーシブ対応を検討するきっかけとなった児童・生徒（※以下「対象の子ども」と略）について

対象の子どもの学齢 高3 18歳
例：小6 12歳

障害種別：
知的障がい、知的障がいを伴う ASD
高機能自閉、アスペルガー症候群 読み書き障がい
注意欠損多動性障がい (AD/HD) 肢体不自由
聴覚障がい 構音障がい 視覚障がい 病弱
重度重複障がい その他 ()

主訴 (主な困り) 読む 書く 聞く 見る 話す 記憶する 移動する
その他 ()

その他補足
・字が整わず、非常に読みにくい。
・ぼそぼそ話すので、何を言っているのか伝わりにくい。
・注意の集中が難しく、一斉指示では内容を理解できていない。
・いつ?どんなことを?どのタイミングで?メモをすればいいのか分からない。
・予定帳に持ち物を書いても、家庭で見直す習慣が無く、忘れ物が多い。
・予定の変更を後から言われると、受け入れに時間を要する。最初から知っているのと、対応しやすくなる。

■対象の子どもが利用している ICT について

①利用端末（ハード） タブレット PC その他（スマートフォン）

②OS Windows MacOS Chrome Android OS その他

③使用した ICT の機能やアプリを教えてください。複数あれば、ボックスを追加して記載してください。ネイティブアプリ（最初から搭載されているアプリ）の URL は記載不要です。

名称：Gemini（ネイティブアプリ）

紹介 URL：

名称：Google カレンダー（ネイティブアプリ）

紹介 URL：

④上記の ICT を活用して、対象の子どもの困りをどのように軽減されたかを詳しく記載ください。

事例 1：思いを Gemini に伝え、出力された下書きを添削して、お礼状や志望理由を完成。

お礼状や志望理由を書くために、振り返り用ワークシートに自筆で記入することが従来の方法であった。本生徒の場合、字が小さく形も整わないため、教師の読解が困難又は非常に時間を要していた。また、文は書けるが、テーマに沿った文章として構成することも苦手としていた。

そこで、お礼状の作成では、教師が用意したマインドマップに生徒がパソコンで振り返りの内容を入力し、それを Gemini に下書きを依頼した。出力された下書きを、生徒が事実や自分の気持ちに合っているかどうか添削し、完成させることができた。

就職希望先へ提出する志望理由を考えるときは、作成用ワークシートの項目と自分の考えを私物のスマートフォン（*メモ帳：ネイティブアプリ）に入力した。その内容を Gemini に送り、志望理由の下書きを依頼した。出力された内容が合っているか確認を終えた後、教師に提出をした。ここまでを教師の指示を受けることなく、自分で考えて行うことができた。

本生徒の書字や話し方に対し、作文の指導に至る前に、字をきれいに書くことやはっきり伝えることをかつては重点的に指導されていた。また、清書として間違えずに丁寧に書き上げるためには、想像以上の労力を要して今まで取り組んできたと考えられた。このような生徒が、「PC で文を入力したものを Gemini が下書きをして、最後は自分で見直す」という作文の作成方法を学んだことで、志望理由作成については私物のスマートフォンを使って「自力で」行うことができた。

■インクルーシブ対応に向けての工夫について

①前問で、「いいえ」と回答された方にお伺いします。環境整備に向けた実施事項/工夫点について記載ください

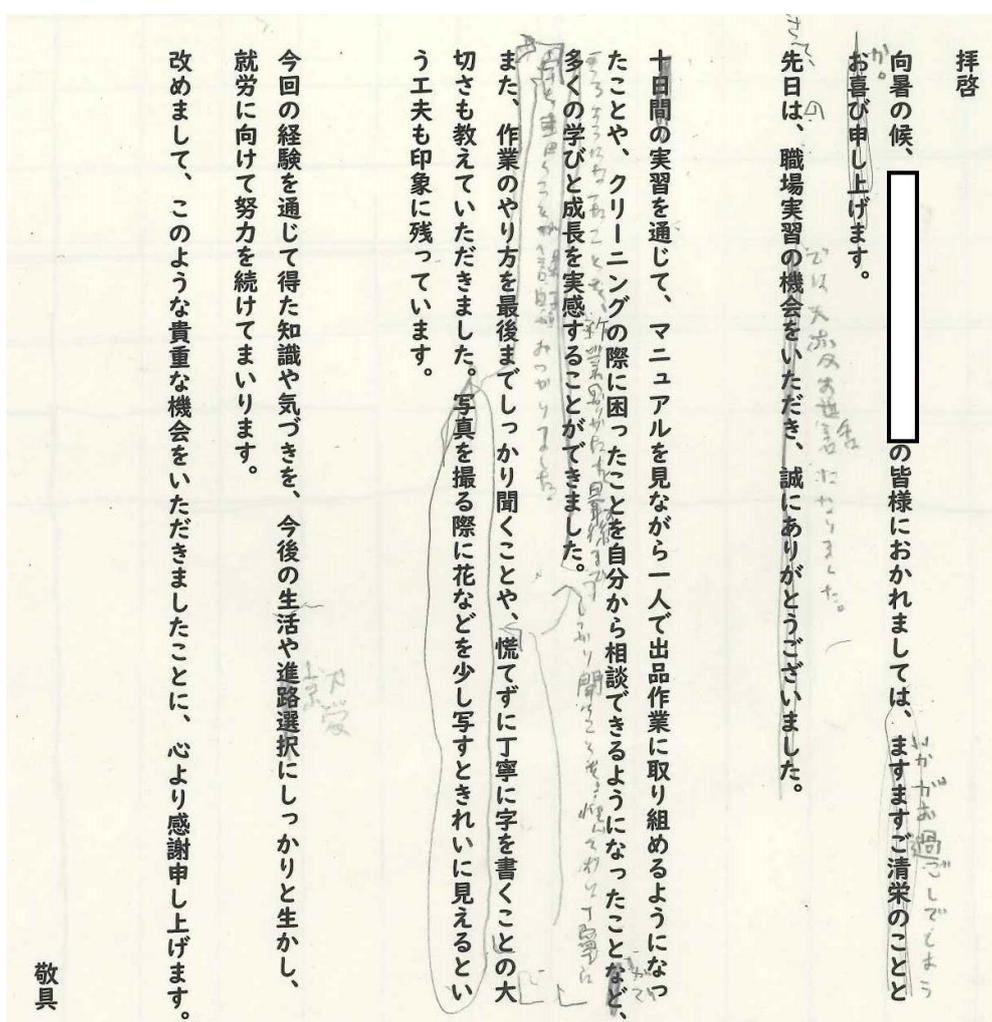
実施事項/工夫点

■その他

参考になる写真があれば、こちらに添付してください。

※個人の写真が含まれる場合、事前に保護者の許可が得られているものに限りま

す。詳細は投稿要綱をご確認ください。



事例1: 思いを Gemini に伝え、出力された下書きを添削して、お礼状や志望理由を完成

- ・「これは教わったことがから印象に残ったことではない。」「(ワークシートの)お手本と言葉が違う。」のように自分の考えを教師に伝えながら、AIの下書きを添削。教師ではなく人間関係のしがらみのないAIの回答だからこそ、自分が言いたいことになっているかという主体的な学びの姿勢が引き出された。
- ・手書きだと字が整わない様子もうかがえる。

■変化や効果について

①対象の子どもにどのような変化がありましたか

- ・「本人に思いはあるけど、言葉や文字で上手く伝えられない。聞き手は分かってあげられない。」というお互いのストレスを、ICTによって解消することができた。文字を入力した画面を提示しながら言葉で説明する、という方法が自分に合っていると気づき、卒業後の合理的配慮としてこのような方法を認めてほしいと伝える姿が見られた。
- ・お礼状作成時に教わった生成 AI を用いる方法を本人が覚えており、志望理由作成時には自分でこの方法を選択し、完成した物を提出することができた。授業の目標を達成するために、自分に合う方法を自ら選んで学びを進めることができた。提出時、「僕のスマホ（*生成 AI）は、話せば（文章を）直せるんです。」と誇らしげに担任に語った。どちらかと言えば受け身傾向にある生徒だが、こうすれば自分でできるという主体的に学ぶ姿が見られた。

②対象の子ども以外の児童・生徒や、学校全体にどのような変化がありましたか

- ・生成 AI による文章構成の下書きや推敲は、本生徒に限定せず学級の生徒全員に向けて紹介した。そのため、自分で下書きをして添削を教師に依頼する生徒もいた。生成 AI を使うこともできる、という選択肢を示すことで、ICT を使うことが特別なことではなく、自分に合った方法を選ぶことが大事であるという学級の雰囲気をつくった。それによって、生徒自身が自分に合う方法を選び、「～だから、こうしたい。」という考えをもって学習に取り組む姿勢が見られた。
- ・もし、ICT の活用という視点をもたなかったら、「教師の話聞いていない本人の問題。」や「指示事項を忘れるから、繰り返しの指示が必要。」のような本人に責任を求める発想に陥ってしまったかもしれない。「スマートフォンのアプリを使って、本人の苦手を補えないだろうか？」という仮説を立てたことによって、いつ？どんなときに？どんな失敗をするのか？どこを変えれば改善できそうか？のような、行動に焦点を当てた検討を教師間で自然に行うことができるようになった。
- ・自分の苦手な部分をスマートフォンの機能で補い、主体性をもって学習や生活を整えることをとおして、達成感や自己支援を育む本実践は、自立活動としての要素も多く含まれている。校内の自立活動の研修で本実践を報告したことで、自立活動のやり方の一つの例として示すことができた。